

# 教育子午線

Summer 2005

## Kyoiku-Shigosen



- キャンパス通信
- 附属だより
- うれしの交差点

● 教育最前線

日本の子どもの学力は本当に低下したのか

# 学力論争のゆくえ

● 日々是研究

西岡伸紀

● Watching ゼミ&講座

吉田達弘ゼミ

「白猫でも黒猫でもネズミをとる猫が良い猫だ」という有名な言葉があります。中国の開放改革路線を押し進めた鄧小平の言葉と伝えられています。私の好きな言葉の一つです。目指す「結果」が得られるかどうかこそが大事であって、それ以外のイデオロギー的なことなど非本質的なことを論じていても仕方無いじゃないか、という意味です。

教育の場合も同じでしょう。「ゆとり教育」だろうと「基礎・基本の徹底」だろうと、「子ども中心」であろうと「責任ある指導」であろうと、本当はどうでもいいのです。「みんなイキイキ」とか「子どもの目がキラキラ」といった美辞麗句など、本当は枝葉末節のことなので

す。教育は結局のところ、人間的かつ社会的な「育ち」が実現するかどうか、それに相応した「力」がつかどうか、です。保護者も社会も教育に期待しているのは、こうした「育ち」とか「力」といった「結果」にはほかならないのです。

現在、中央教育審議会が進めている教育改革の方向は、一言で言えば「結果」の出る教育への転換です。学習指導要領の最低基準性も、発展的な学習の奨励も、絶対評価（目標準拠評価）への転換も、学力向上を目指す諸施策も、背景にあるのは「結果」重視の教育ビジョンであると言っでよいでしょう。だからこそ、一人ひとりの子どもに「確かな学力」と「豊かな心」が実現することが強調されているのです。

より本質的な地点から言えば「我々の世界（世の中・世間）」

を生きたと、「我の世界（自分自身の独自固有の世界・自分の人生）」を生きる

力が育っていくことこそが、親も教育者も教育行政関係者

も本来的に願っている究極的な「結果」であるはず。言い換える

なら、自らの「我の世界」に深く足を降ろし、自らの人生を自らの責任によって生きていくという自覚

を持ちつつ、それを土台に「我々の世界」に参画し、自らの使命役割

を責任を持って果たしていく、という方向への「育ち」を実現してい

くことこそが、真の教育ではないでしょうか。「我の世界」への自覚

を欠き、「我々の世界」に生きる覚

悟も力も不

十分に見える

若者の姿が毎日

のように報じられている現状を見

るにつけ、本質的な意味での「結

果」を教育に求めていかねばなら

ないという思いが強くなります。

一部のマスコミや教育界を賑わ

している不毛な論議に惑わされる

ことなく、教育の目指すべき本来

の「結果」について、真剣に考えて

いきたいものです。



いち かい たい かい 校長 梶田 毅一

白猫でも黒猫でも「結果」の出る教育を



#### 1月

15日~16日

◎平成17年度大学入試センター試験

25日

◎学部推薦入学者選抜試験

◎附属中学校立志式

27日

◎附属幼稚園研究発表会

27日~28日

◎附属小学校研究発表会



#### 2月

10日

◎学部推薦入学者選抜試験合格者発表

13日

◎連合学校教育学研究科入学者選抜試験

16日

◎連合学校教育学研究科入学者選抜試験合格者発表

19日

◎附属小学校うれしのフェスティバル

25日~26日

◎学部前期日程入学者選抜試験

27日

◎学部私費外国人留学生特別選抜試験

#### 3月

7日

◎学部前期日程入学者選抜試験合格者発表

12日

◎学部後期日程入学者選抜試験

13日

◎大学院第2次募集入学者選抜試験

14日

◎附属中学校卒業証書授与式

16日

◎附属幼稚園修了証書授与式

18日

◎附属小学校卒業証書授与式

22日

◎学部後期日程入学者選抜試験合格者発表

◎大学院第2次募集入学者選抜試験合格者発表

23日

◎大学院学校教育研究科学学位記授与式

◎学部学位記授与式

◎大学院学校教育研究科(夜間クラス)学位記授与式

28日

◎大学院連合学校教育研究科学学位記授与式

#### 4月

1日

教育・社会調査研究センターを開設

6日

◎大学院学校教育研究科入学式  
◎学部入学式

11日

◎附属小学校、中学校入学式



学部入学式



附属小学校入学式

### はじめまして



おお ぜき たつ や  
**大関達也** (教育基礎講座講師)

今年4月1日付けで教育基礎講座に着任しました。専門は教育哲学・思想です。これまでは20世紀ドイツを代表する哲学者、H.-G.ガダマーの思想を手掛かりにして、教養を異質なもの同士の対話として実現する道を探究してきました。教育基礎講座では、さまざまな関係に含まれる差異と異質性の観点から、教育コミュニケーションの可能性と限界について考察を深めていきたいと考えています。

16 15 14 12 11 10 09 08 04

兵庫教育大学からのお知らせ

うれしの交差点

「人間発達科」  
教育プログラムの開発研究について  
松村京子(附属小学校校長)

附属だより

キャンパス通信

卒業生からの手紙

Watching 7/11&講座  
吉田達弘ゼミ(言語系教育講座外国語分野)

教育現場からの質問  
教員の著書紹介

日々は研究  
喫煙防止教育の追跡研究に見る  
「知識」と「態度・行動」の推移  
西岡伸紀(生活・健康系教育講座教授)

教育最前線  
学力論争のゆくえ  
日本の子どもの学力は本当に低下したのか

## 教育子午線

Kyoiku-Shigosen

Summer 2005

受験競争の激化や画一的な詰め込み教育などの教育問題の解決策として、1992年から始まった「ゆとり教育」。しかし、近年、国際比較調査などで日本の子どもの学力低下が指摘されたことを受け、その原因にゆとり路線を挙げる声があります。教育現場では、総合学習の在り方や学力保障への具体的な取り組みなどをめぐって困惑が増す一方で、ゆとり以前の知識中心の教え込み教育への逆戻りといった危険性もはらんでいます。そこで、これまでの学力論争を整理し、教育改革の意義と課題を明らかにするとともに、今後の教育の在り方について考えてみましょう。

## さまざまな 学力観があり それぞれに 問題点がある

学力低下については1990年代の終わり、小・中学校、高校の学習指導要領が改訂される前後からさまざまな議論が続いています。とりわけ、2001年の改訂以降、種々の学力調査――①大学研究者グループによる大学生の基礎的数学計算能力の

国内調査、②文部科学省がこの3年間に公表した小・中学生の基礎学力国内調査、③経済開発機構(OECD)による15歳対象のPIISA(00年、03年)と国際教育到達度評価学会(IEA)によるTIMSS(99年、03年)な

の学力論争にある学力観の違いや立場を整理してみましょう。第一の立場は、学力低下を基礎的計算能力の調査結果から指摘し、「基礎学力」の向上を主張。総合的な学習に象徴される「ゆとり路線」を批判し、読み書き・

(二)一般教育的学力観)。第三の立場は教科教育も総合的な学習も必要と唱え、特に総合的な学習を支持し、教科学習による基礎学力と生活・実践的学力<sup>1)</sup>主体的、問題解決的学習力を強調しています。

それぞれの立場に問題点があります。第一の立場は、読み書き能力に限定する学力を主張すること、計算や漢字などのドリル学習を助長します。単純に「百マス計算」を導入することは問題であり、各教科内容の深い

線 前 最 育 教

# 学力論争のゆくえ

日本の子どもの学力は本当に低下したのか

どの国際比較調査―が援用される学力問題は一層広く議論されるようになってきました。学力論争の背後にはさまざまな学力観が表れており、それぞれ微妙な、また大きな違いが見られます。それでは、現在まで

計算に限定して学力を捉えています<sup>2)</sup>。第二の立場は学力を各教科の基礎基本から捉え、教科内容の質・量的基準、教科書の質量の低下を問題とし、発展的学習<sup>3)</sup>発展的内容の必要性をも主張しています

理解、興味の拡大を制約してしまいます。第二の立場は広く各教科内容の習得を主張するのは正しいですが、テストのために詰め込み学習や競争を助長してしまいます。90年代半ばの調査でも小学校高学年の授業の7割近くは説明的で、発見的、探究的学習の工夫など教育方法上の問題がありました。第三の立場は教科学習と総合的な学習の教育課程への位置付けを主張、支持しても、特に後者の教科性が希薄で活動・体験主義になり、



両者の関係付けの仕方を説明していません。

## フィンランドの 取り組みに見る 今後の学習指導の 在り方

OECDが実施したPISAでは、日本の子どもの読解力の低下も指摘されていますが、00年と03年の調査で読解力が世界トップにランクされたのがフィンランドです。この国の学校教育の在り方には、これからの日本の教育が進むべき道筋のヒントが隠されています。「教育」(国土社刊)05年6月号では「フィンランドの教育の歴史と現在」のテーマのもとで中島博早稲田大学名誉教授が次のように述べています。

「フィンランドでは、読解力が世界でトップだった00年PISA調査の後、「リーディングフィンランド」というプロジェクトを立ち上げ、全国図書館協会、全国図書館・雑誌出版協会の支援を受けて学校図書館の充実を図る一方で、親が読み、先生が読み、読書は楽しいことと教える。

また、作家や地域図書館司書

を学校に連れてきて話をさせる。授業でも発表の機会を増やす。読み聞かせのボランティアで親が学校にやってくる。といったことを重点的にとりくんだ。」

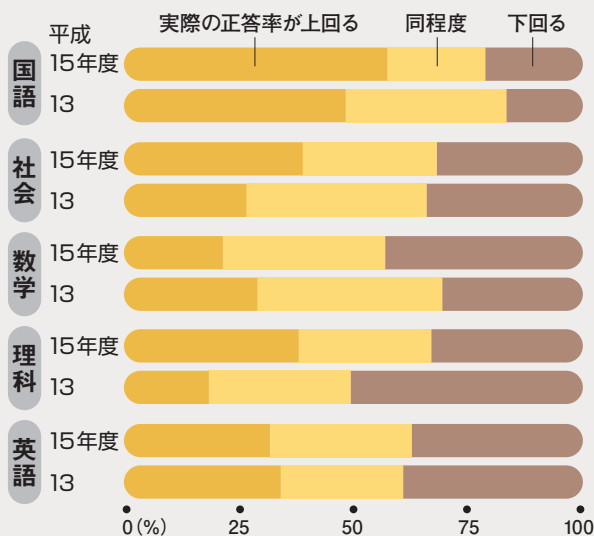
PISA調査の順位が落ちて、ことを「学力低下」ととらえて即

身に付けることにつながります。地域、保護者、学校が一体となつて「読むことの学習指導」を支えている点は大いに注目すべきではないでしょうか。

フィンランドのような、基本

にある形成的評価を生かした到

### 予想正解率との比較(中2)



文部科学省が平成16年度に、小学5年～中学3年を対象に実施した学力テスト「教育課程実施状況調査」の結果。前回(13年度)より計算問題を中心に正答率が上がったが、小学5年で「北海道」が分らない子どもが約半数に上ったほか、記述問題などは正答率が低下し、「読解力」などに依然、課題を残した。

「基礎学力定着を目指した訓練学習を」という主張に流れるのではなく、フィンランドのように図書館を充実させ、親や教師が読み、読書は楽しいことを教えるプロジェクトを展開する方が、本当の意味での「読解力」を

達度学習や相互学習と個別学習を組み合わせた学習形態の工夫は示唆的です。日本でも教科学習と関連付けた総合的な学習は発展的学習を可能にするものであり、すでにその実績を上げた学校も出てきています。教科学

## わ ー ど 解 説



※①PISA…The Programme for International Student Assessment(学習到達度調査)の略。OECD(経済協力開発機構)が2000年から3年ごとに行っている調査。調査の対象は義務教育終了段階の15歳の学生。数学的リテラシー、読解リテラシー、科学的リテラシー、問題解決能力の4領域の知識と技能について調査する。

※②TIMSS…The Third International Mathematics and Science Study(国際数学・理科教育調査)の略。1964年に国際教育到達度評価学会(IEA)が初めて実施。これまで3回の調査が行われ、世界46カ国が参加している。

※③3R's…学校教育でいわれる基礎学力「読み、書き、計算」の別称。3R's-Reading, Writing, Arithmetic。



◆TEXT=金丸晃二(教育方法講座助教授)  
堀江祐爾(言語系教育講座教授)





小学校教員  
なか た たか とし  
**中田高俊**さん  
附属小学校教諭

## 学びの意味や 価値を確かめる

造形教育(図画工作)を通して、学力は「知識・理解・技能」だけでは十分に支えられないと感じていました。「ヒト・モノ・コト」に対して感じる力、かかわろうとする力が表現にも鑑賞にも欠かせないからです。いずれも感情や五感とつながった「見えない学力」です。私は見えない学力の欠如が「見える学力」の低下に直結すると考えています。

もはやバブル以前の、知識・理解・技能の習得が未来を保障する時代ではありません。個々人が生きていく上で、学びの意味や価値がなければ、知識・理解・技能は絵に描いた餅に過ぎません。子どもたちが身の回りのヒト・モノ・コトに対して仲良くなりたいとか、もっと知りたいといった動機があつてこそその知識・理解・技能です。

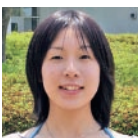
「ゆとり」や「個性」を尊重し、見えない学力を重視した教育改革は間違ひではありません。問題は、見えない学力の内実を探らずにゆとりや個性が押し出されたことにあります。したがって、授業で子どもを探り、学びの意味や価値を確かめつつ授業に反映させ、機知に富んだかかわりをする必要があると考へます。このような見えない学力の付け方を「見えるかたち」にしていくことが、これからの私たちの責務ではないでしょうか。



中学校教員  
みや かわ よう いち  
**宮川洋一**さん  
信州大学教育学部附属長野中学校教諭  
(大学院連合学校教育学研究科  
生活・健康系教育連合講座1年)

## 単元や題材の 構成などに工夫を

学力には、習得の程度が測りやすい知識や技能のような学力もあれば、表現力、判断力、思考力といった測りにくい学力もあります。学校現場ではこれらの両方を基礎学力としてとらえるとともに、基礎学力を活用して、自ら問題を見つけ、解決に向かって追究したり、学び方を身に付けたりしながら、今の自分をさらに高めていく生徒の姿をめざしています。それが生徒の生きる力をはぐくむことにつながると考えているからです。



学部生  
お が わ  
**小川さつき**さん  
学校教育学部  
言語系コース4年

## 学ぶ過程を大切に

最近の生徒の様子を見ると、測りやすい学力の低下よりも、むしろ測りにくい学力の低下、さらに両学力を支える「学ぶ意欲」の低下こそ問題であると感じています。そこで、私たちは生徒の学ぶ意欲を高めるため、学ぶことの必要性や有用性を実感できるような単元・題材構成、級友との協同的・互恵的な学習を通して、学ぶ意欲を高めていく生徒の具現をめざしています。

学んだ成果は、テストの点や○×だけで決まるものではありませんが、どうしてもこれらだけに目を向けて一喜一憂しがちです。成果も大切ですが、学ぶ過程に注目すると、そこには少なからず高揚感もあると思います。それは「？」の正体が解けそうな瞬間です。この「？」を解決するとき、まるで探偵になったような気分になるものです。

気持ちの上での話ですが、そう気負って学ぶことはないと思います。むしろ学ぶことに対してもっと気楽に、そしてその過程を楽しむ方がいいと思います。そうすることで、学ぶことへの抵抗感が和らげばいいと考えます。

「学力論争」私はいこう考える

# 学力競争のゆくえ



## 梶田学長が答える 学力低下を招いた背景と 内面性の教育の必要性

—2000年と03年に、国際教育到達度評価協会（IEA）と経済協力開発機構（OECD）が行った国際比較調査で、日本の子どもの学力が低下し、学習意欲や学習時間が先進国の中で最低水準であることが明らかになった。その原因に1992年に始まった「ゆとり教育」を指摘する声があるが。

指摘の通りです。本来「ゆとり教育」は、学んだことを確実に身に付けるため、子どもがじっくりと学習に取り組めるようにしていることがスタートしました。しかし、一部の教育学者や役人が「教え込んではいけない」「頑張れ」と言っただけで「ゆとり教育」と言ってしまう傾向が、極めて安易な教育に陥ってしまいました。こんな反教育的な考え方が流布されたことで、いい加減な授業が増え、学校生活の中で得られる達成感や効力感、満足感が乏しくなりました。不登校の児童・生徒が増えてきたのもこのあたりからです。90年代の「括弧付きのゆとり教育」は、学力の低下、学習意欲の低下、読書量の低下、不登校を含めた問題行動の増加を招

いたのです。

「ゆとり教育への批判が厳しさを増しているが、4月に文部科学省が公表した「学力テスト（教育課程実施状況調査）」の結果は、小5・中3の延べ23教科のうち、中1の社会と数学を除くすべての教科で前回（02年）の点数を上回った。これは学力向上のきざしと見るべきなのか。

今回は02年から始まった新学習指導要領の定着度を見る初めてのテストでした。点数が上がった要因は、00年12月に教育改革国民会議が最終報告として出した「教育を変えよう」の提案によって、90年代のゆとり教育に終止符が打たれたからでしょう。簡単に言えば、子どもや親、社会に対して責任の取れる教育をしていこう、子どもの自主性・自発性に任せるような無責任な教育姿勢を払拭しよう、という方向に転換したのです。

翌年1月6日に発足した文部科学省はその結論を踏まえて、現在も教育改革を進めています。文科省が発足した当時、小野元之事務次官は全国都道府県教育長協議会の席上

で「ゆとり教育の前提は基礎教育の徹底にある。ゆとり教育が一部で「ゆるみ」になっている。児童・生徒の自主性・自発性の尊重が一部で指導の放棄になっている。総合学習の一部で単なる遊びになっている。学習指導要領は標準ではなく最低基準である」などと発言しました。すなわち、文科省はゆとり教育について、90年代に唱えていた内容が180度変えたのです。これが学習指導要領の新たな運用方針につながっていきました。

「一口に学力と言っても、ペーパーテストで測る学力もあれば、総合学習などで得られる学力もある。新聞報道などを見ると両者を対立構造としてとらえているようだが。

ペーパーテストのような目に見えるかたちでの学力測定は当然、必要です。例えば、算数・数学では計算も応用問題も解けなければいけません。さらに、子どもにも算数・数学への関心を持たせることができれば、もっと勉強しようという意欲がわき、計算や演算の仕組みに対する考え方が深まってくる。

現在、文部科学省が強調している「確かな学力」とは、ペーパーテストで成果が測れる知識や技能に加え、子どもたちが学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力などを含むものです。90年代のゆとり教育が学力低下を招いたことを受け、一時期、ドリル学習などの反復学習のみを重視する動きが見られました。しかし、教育は常にバランスです。「ゆとりか学力か」ではなく「ゆとりも学力も」でなくては、教師の指示や指導と、子どもたちの自主・自発性の双方が不可欠なのです。

「確かな学力を確立させるための指導方法として、学長は「内面性の教育」を提唱しているが。

「内面性の教育」とは、児童・生徒が学んだことを自身の内側に根付かせることです。私は学習の成果は最終的には内面的なものだと考えています。外側に上手に表せるかどうかだけで学習成果を論じる、非常に薄っぺらな考え方が横行しているように思います。教師は生徒が10人いれば10

の指導方法があるということを確認しなければなりません。みんなが一つの世界を同じように見ていると思いがちですが、まったく同じ見方をしているのは2人としていません。「みんな分りましたね」と子どもたちに問いかけると、大勢の声が「分かった」と返してはいいけません。すべての教育の問い直しをするのが内面性の教育です。ベテランの教員は自ずからそれを実践しています。生徒に向かって「みんなは」とは言わずに「あなたは、あなたは」と一人ずつに声をかけます。「○○さんならこういう言い方をするかな。先生はこう見えるね」と、生徒一人ひとりの視点に立った授業をします。

内面性の教育の実践するためには、日々の活動の振り返りが大切です。教師同士の集まりには積極的に出席し、ほかの教師の話も聞く。自分が気付かないことをほかの人は気付いているとか、自分のこだわりが他者とは違うとかが分かります。そういう作業を心掛けていくことで、内面性の教育に対する理解は深まっていくと思います。



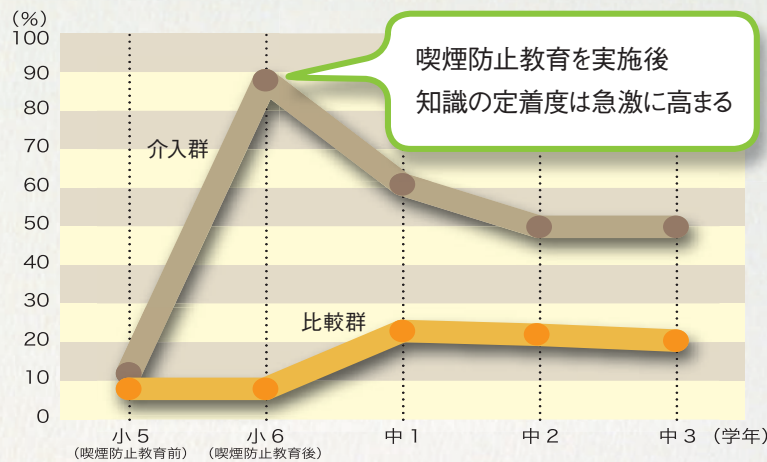
にし おかのぶ き  
**西岡伸紀**

生活・健康系教育講座教授



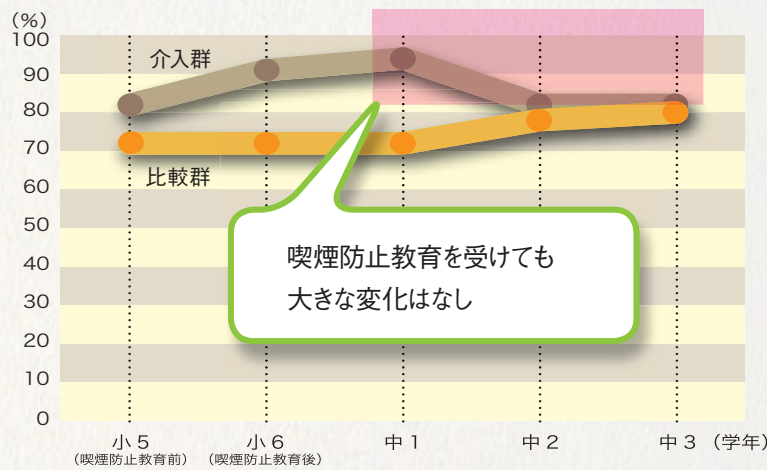
# 喫煙防止教育の追跡研究に見る 「知識」と「態度・行動」の推移

喫煙の有害性に関する知識を持つ者の割合 <グラフ1>



喫煙防止教育を実施後  
知識の定着度は急激に高まる

成人時に非喫煙の意志を持つ者の割合 <グラフ2>



喫煙防止教育を受けても  
大きな変化はなし

私は、子どもの喫煙や飲酒、薬物乱用、事故など、一度事が起これば重大な結果に至る健康・安全問題の一次予防(発症防止)に

ついて研究しています。その中でも、「喫煙防止教育に関する5年間の追跡研究」は大きな示唆を与えてくれました。

この研究では、介入群約1000人と比較群約2000人を学校単位で設け、介入群には小学5、6年に延べ6時間の喫煙防止教育を行い、両群とも小学5年から中学3年まで毎年追跡調査をしました。その結果、まず、知識は態度や行動に比べて劇的に変化することを実感しました。グラフ1は、自由記述形式で調べた喫煙の有害性の知識を持つ者の割合を示したもので、それは急激に高まり徐々に低下していきました。一方、グラフ2の成人時に非喫煙の意思を持つ者の割合は、中学1年まで効果は見られたものの、全般的にマイルドな変化しか示しませんでした。健康教育の効果として、時に、態度や行動も知識と同程度に変化することが期待されますが、大きな誤解ではないでしょうか。

また、子どもたちに問題の重大性を認識させることは比較的簡単であるが、問題対処の自信を高めるのは容易ではないことも分かりました。介入群にはタバコの誘いを断る学習を行いました。その介入群において対処の自信が低下してしまいました。「教育をすれば自信が高まるのは当然」と考えていた私には大きなショックでした。子どもたちは対処の難しさを理解したものの、効果的で現実的な対処策を見出すには至らなかったと考えられます。

しかし、適切なプログラムであれば自信は向上します。このプログラムでは、適切な対処の仕方がさまざまあることの気づきを促し対処法の練習を充実させるなど、改善を図りました。さらに教師には、対処法指導のためのワークショップを行いました。その結果、対処の自信は有意に向上しました。当たり前のことですが、プログラムを充実させれば相応の結果が得られるわけです。



# Q&A



アドバイザー  
さとうしん  
**佐藤真**  
総合学習系教育  
講座助教授

## <真の格言>

- ◆子どもの学力の低下よりも、大人の教養の解体の方が問題。
- ◆マスコミ等の情報に踊らされず、教育専門家として確かな情報リテラシーで判断を。
- ◆教育は、訓育と陶冶の両全を目指す営みであることを忘れてはならない。

国際的な学力調査の結果などから学力低下が叫ばれています。基礎学力をつけるためには、やはり暗記や暗誦などの詰め込み教育が必要なのではないでしょうか。

**A**

2004年12月にPISA (Programme for International Student Assessment) と TIMSS (Trends in International Mathematics and Science Study) の結果が報告されました。PISAはOECD加盟国を中心に15歳児を対象とした学習到達度テストで、3年ごとに実施されるものです。今回は、読解リテラシー(問題解決能力を含む)、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野が調査対象でした。本来、リテラシー(Literacy)とは、読み書き(特に母国語)能力のことで、これに計算能力を加える考え方もあります。教育では、人間が社会で文化的に生活するための必須



な基本的教育内容を指します。今回の調査は、極めて基礎的な2009のスキルではなく、リテラシー概念としての「実生活のさまざまな場面で直面する課題に、知識や技能をどの程度活用できるか」ということが評価されました。すなわち、概念理解や思考力とともに、実生活で遭遇するさまざまな状況に対応して統合し、活用する能力が問われたのです。

したがって、もし教科カリキュラムで単純な習得や習熟だけをしたのでは、これらの調査に答えることは難しいといえます。そのためにも「総合的な学習の時間」において、教科で培った知識や技能などの「定型知」を、「状況知」として統合し活用する能力を培うことが必要です。

なお、現在、情報リテラシーや人間関係リテラシー、さらにはファンクショナルリテラシーなど、私たちが社会で文化的に生活するためのリテラシー概念は拡張しています。今後はこれらに対応した教育活動を考えることも重要でしょう。



## Books

### 教員の著書紹介



## 『“エネルギー問題”をめぐる論点・争点と授業づくり』

(明治図書・2005年2月刊)  
編著:岩田一彦(社会系教育講座教授)

人は学校教育が終わると一般社会に出ていく。学校教育は社会で活動していくことができる資質をはぐくむ義務がある。ある意味では無風状態の学校とは違い、日々、価値判断を迫られるのが一般社会である。この状況に学校教育が対応していくためには、価値判断の分かれる問題に取り組み、価値判断能力を形成しておくことが必要である。

こういった問題意識の下に『社会科教材の論点・争点と授業づくり』10巻を計画しました。第5巻である本書は“エネルギー問題”を素材として、理論を組み立て授業づくりをした成果です。

構成は次のようになっています。

- ◆社会科教育におけるエネルギー問題
  - ◆エネルギー問題を考える視点・教材解釈
  - ◆エネルギー問題をめぐる社会科授業の焦点
  - ◆エネルギー問題をめぐる社会科論争授業の設計
- エネルギーは日常生活と直接的につながっています。したがって、子どもが論争問題として考えやすいものです。例えば「コンビニの24時間営業は続けるべきか」「日本でも国内幹線ガスパイプラインを建設すべきか」「採算の合わない小規模水力発電所を建設すべきか」などの開発された論争問題は、エネルギー問題を考える基本的視点の形成と価値判断能力の形成に有効に働いています。

なお、本書11名の執筆者全員が私のゼミの修了生です。

※教員の著書は附属図書館で閲覧できます。詳しくは学術情報課 ☎0795-44-2062へお問い合わせください。

ゼミの参加者。(左回りに)安川さん、的場さん、エンさん、ソさん、福岡さん、吉田、ティラーさん



# コーヒート 多文化の 「アロマ」が 漂うゼミ

「英語8割 日本語2割」。ゼミで飛び交う言語はこんな感じになっています。というのも、昨年度からアメリカ出身のマーク・ティラーさんが、今年度からは2人の中国人留学生、ソ・コウさんとエン・エンさんが加わったからです。

ティラーさんは加東郡のA L T (外国語指導助手)として10年近く勤務し、現在は、大学院で学ぶ傍ら、附属中学校のA L Tとしても活躍されています。中国・大連市の英語教員であるソ

んは、以前に教員研修留学生として本学に在籍したこともあり、中国国内でベストティーチャーの一人に選ばれたという経歴を持っています。エンさんも本学の学部生として留学経験があり、今春、大学院への再留学となりました。この3人に加えて、現職派遣で在籍している的場真弓さん(大学院2年)、ストリート学生の福岡拓矢さん(同1年)、修士生でありながら、現在も参加してくれている安川佳子さん(関西国際大学勤務)というメンバーがそろっています。

ゼミでは、英語科教育に関するさまざまな研究テーマについてディスカッションします。「実践と理論の往復を続けながら、授業を探究する力を伸ばしていく」が合言葉です。これまで取り上げてきた研究テーマは、実際に教室で子どもたちと向き合うものが多く、例えば、英語科における協働学習や授業でのインタラクティブ、コンピュータを活用した英語教育、小学校の英語教育などです。

## Watching ゼミ & 講座



よし だ たつ ひろ  
**吉田達弘ゼミ**  
言語系教育講座外国語分野

異文化で育った学生と対話をすることは、自分の置かれている状況をより相対化することにつながります。例えば、言語教育政策はその国の政治的、経済的、文化的な要因と結びついていて、独特な制度をつくっていることがあらためて分かるし、学校教育でなぜ英語を学ぶのかを考えるヒントにもなります。

一方で、共通点も発見できます。特に、英語を学ぼうとする子どもたちの意欲を育てるには、豊かな経験を生み出す授業のデザインがカギだということはどこかの教室でも同じです。英語を使いながら自己を表現し、他者の声に耳を傾ける授業、つまり、コミュニケーションを実践する場が必要で、私たちのゼミもまさにコミュニケーション実践の場ですが、最も鍛えられているのは、実は、教員の私自身のような気がします。

では、最後に学生の声を紹介しますしよ。

「私はコンピュータを活用した英語教育実践を研究する予定です」

す。異なった教育事情を背景にしてゼミで討論できるというのは本当に刺激的です。また、扱う資料・文献は、私にとって先進的なもので研究・教育実践に役立っています」(ソさん)



「ゼミの雰囲気を一言で表現すると、『フレンドリー』ではないでしょうか。毎回、先生がローストしたコーヒーの香りで始まりますが、これもinternationalな雰囲気を高めているのだと思います」(的場さん)。

◆ コーヒート多文化の「アロマ」を漂わせながら、今日もまたディスカッションが始まります。  
<http://www.soc.hyogo-u.ac.jp/tyoshida>





くぼひろみ  
**久保裕視**さん

市立伊丹高校英語科教諭

市立伊丹高校で英語科教諭を務めた後、2001年に大学院学校教育研究科教科・領域教育専攻言語系コース(英語分野)入学。03年に同コースを修了し、再び伊丹高校に着任。ディベート指導の実績が認められ、昨年、第53回読売教育賞を受賞した。

市立伊丹高校の生徒に英語によるディベートの指導を開始したのは1986年のことでした。翌87年、その年から始まった「高校対抗英語ディベート大会」に参加。今年も2月23日に兵庫県立国際高校で県内の3高校が参加して第11回大会が開かれました。

約20年間にわたって、ディベートを指導してきた理由は、「中学・高校・大学と10年間英語を勉強しても英語が使えない」という日本の英語教育に対する批判への私なりの解決策を提案したかったからです。

その解決策とは「読み、聞き、話し、書かざるを得ない環境を設定すれば、生徒は英語を4技能にわたり学習できる」。その環境こそがディベートであり、生徒は英語を4技能にわたり学習することが求められます。

ディベートはまず、立論を書く(Writing)ことから始まり、第2段階の尋問で聞き(Listening)、そして質問

↓  
**英語教育への批判に対する解決策**



ディベートの指導は2年生の新学期から始めます

(Speaking)し、第3段階の反駁では急いで書き加えたり(Writing)しながら相手の弱点を攻撃(Speaking)します。最終的に自分たちの原稿を修正しつつ(Writing)、審査員に自分たちの優位さを訴えて(Speaking)終了します。大会には参加各校から4班が出場します。第10回大会では市立伊丹高校は3勝1敗と参加校の中で最高の勝率を取めました。毎年、40人の生徒全員が「ディベートの授業は意義があった」と回答しています。



おおたしょうじろう  
**太田詳次郎**さん

オフィス遊ing主宰

1997年、学校教育学部芸術系美術コース卒業。99年、生涯学習支援事務所「オフィス遊ing」を設立。子育て支援、教育、ボランティアなどの分野で講演会やレクリエーションの場を開いている。専門はコミュニケーション、グループワーク。兵庫県生涯学習講師団登録講師。

↓  
**心のエンジンを動かすエネルギー**

「最近の子どもは主体性がない」

「何事にもやる気がなくて無気力」

なんて言葉をよく耳にします。本当に子どもは変わってしまったのでしょうか。キャンプなどの体験学習の場面で、子どもたちに「時間を気にしないで思いっきり遊ぼう」



「あそび」は100%主体的だから心をはぐくみます

と言うと、最初は何をしたらいいのかわからず戸惑ってしまいます。しかし、日ごろはゲームばかりしている子どもも本能が目覚めるのか、走り回り、じゃれ合い、水をかけ合い、自分たちで遊びを創りながら、だんだんと野性化していきます。時間がたつにつれ、その環境へ適応していくのです。そして、遊びながら何かをやり遂げた時、「やったー」と声を上げ、満足げで誇らしげな表情が浮かべます。そして目を輝かせてこう言ってくるのです。

「あんなあ、見て見て!こんなできたでえー」

勉強でも遊びでも「やったー」という達成感が子どもの目を輝かせ、ココロを育みます。「やったー」という感情が自信・やる気へと変わり、心というエンジンを動かすガソリンとなるのです。その様子を見て、私は思います。「子どもは何も変わっちゃいないんだなあ。変わってしまったのは社会と大人の心なんだ」と。

テストの結果に一喜一憂するよりも、もっと大切なことがあるはず。学力や行動などの表面的な事象ばかりにとらわれず、その奥に潜む子どものココロを察知する感性がわれわれ、大人に必要なのではないのでしょうか。

日々の生活で、子どもの目はキラキラ輝いていますか。子どものココロの動きを感じていますか。



フィリピンでの活動を梶田一学長に報告

のは4年生の夏。本来なら教員採用試験に向けてラストスパートの時期ですが、

フィリピン行きの話が持ち上がった。2人は休学を決定して渡航しました。「あのころ、まだ自分の中に明確な志がなく、子どもたちに伝えたいことも見えていませんでした。フィリピンに行けばそれが見つかるとは思いませんでした」と山本さんは打ち明けます。



学校教育学部 生活・健康系保健体育コース4年

いちはしまさこ  
**市橋雅子**さん

昨年春の春期休暇中、丹波グリーンフォースのボランティア活動に参加し、フィリピン・ルソン島に3週間滞在。8月、現地コーディネーターを務めたNPO法人・IGS緑化協会のスタッフに誘われ、休学して再びルソン島へ。現地の子どもたちへの教育支援活動を終えて、今年3月に帰国した。

学校教育学部 芸術系美術コース4年

やまもとなほこ  
**山本奈穂子**さん

## フィリピンの子どもたちの笑顔に教育の基本を再認識しました

「向こうにいる間ずっと、この活動に教育的な意味があるのか、単なる遊びではないかと自問自答していました」と市橋さんが言えば、山本さんも「子どもたちは絵を描くのはほどほどにして、すぐ別の遊びに移ろうとするんです。今思えば、絵を描くことは彼らと仲良くなるための手段であって、別の遊びに付き合えば良かったのに、それに気付かず、自分を責めてばかりいました」

子どもたちと鉄板を囲んで料理も作りました



山本さんが企画した「ブーメラン作り」には市橋さんも応援で参加

「日本の子どもと比べて感情表現が豊か」という現地の子どもたちとはすぐに打ち解けられました。2人とも思い描いていたような活動が満足にできなかったと口をそろえます。

「あの7カ月間、私は子どもたちとともに生きていた。教育の基本である、子どもたちと愛情で結ばれた関係を築くことの大切さを再認識しましたね」

最近では教員をめざす上でかけがえない経験をしたと思えるようになってきたそうです。子どもたちの笑顔が並ぶアルバムを見返しながら、山本さんは言います。

現在、市橋さんは7月の教員採用試験に向けて、山本さんは「フィリピンに行ったことで、自分の欠点や弱さが分かり、めざすものが見えてきました。それに向かって努力していきたい」と大学院への進学をめざして勉強中です。近い将来、彼女たちが教壇に立った時、異国での体験は必ずや生かされることでしょう。



## 軟式テニス部

チーム一丸となつて  
リーグ戦での順位は上昇中

ク

部長

学校教育学部生活・健康系コース3年  
あおき こうじ  
**青木康治**さん

軟式テニス部は月・水・金・土の週4回、活動しています。男子8人、女子10人。個性豊かなメンバーがそろって仲良く楽しくテニスをしています。今年度も新しい仲間が加わり、さらに活気あふれる部活になりそうです。

ラ

ブ

私たちは年間を通してさまざまな試合、行事に参加しています。特に大きな大会としては、春と秋に行われる関西学生ソフトテニスリーグ戦があります。

学校教育学部言語系コース3年  
はしもと みさこ  
**橋本美沙子**さん

毎年夏休みには近畿国立大学体育大会にも参加しています。この大会でも上位をめざして健闘しています。今年は本学のテニスコートが会場となっています。その準備にも目を向けながら、いつも以上に練習に励んでいます。ぜひ、テニスコートまで応援に来てください。

経験者・初心者関係なく男女一緒にわきあいあいと練習しています。指導者はいないので、経験者

が初心者を教え、また経験者同士でも教え合い、刺激し合いながら成長しています。2003年度から05年度にかけてのリーグ戦では、女子は5部Bから4部へ、男子は6部Bから5部Cまで昇格しています。協力し合い、チーム一丸となったからこそこの結果だと思っています。これからも、さらに上位をめざし、かつ楽しめる部活にしていきたいと思います。笑顔をモットーに頑張っていくので今後もよろしくお願ひします。

奮

戦

記



キャンパ  
Campus

## NewFace

新 入 学 生



### 生徒たちの模範となる 『先生』をめざしたい

2005年度  
大学院学校教育研究科  
学校教育専攻  
教育コミュニケーションコース入学

かど たりゅうた  
**門田龍太**さん

小学校の教師になること。それが自分の夢です。小学校教員養成プログラムは私にとって夢を切り開く扉でした。勉強するには最適の環境と施設に恵まれ、とても充実したキャンパスライフを過ごしています。

出身大学は教育系の学部ではなかったので、教育について議論できることが何よりもうれしいです。現職の教員の方々から学校現場の現状などを聞くにつけ、「早く学校現場に立ちたい」と思いを巡らします。しかし、現場では問題も山積しているようで、気持ち



だけでは駄目だと実感しています。大学院では自分の研究も大事ですが、「未来の自分の生徒たちのために教師としての資質をしっかり身に付け、生徒たちの模範となる立派な『先生』になれるように惜しみない努力をする」ことを目標に頑張ります。「夢」という種を大事に育て、立派な花を咲かせたいです。



まつむら きょうこ  
**松村京子**  
附属小学校校長

# 内省性と社会性、養護性をはぐくむ 「人間発達科」教育プログラムの開発研究について

附属小学校の研究部には6つの部会があり、その一つが人間発達科部会です。「人間発達科」は2002年度から教科再編のための研究として、文部科学省の研究開発学校の指定を受けています。この研究体制は、附属小学校と大学との共同研究のモデルとしても注目されています。



4年生の「赤ちゃん会の学習」

深刻な社会問題となっているいじめや問題行動、子どもへの虐待など、子どもと親の問題はそれぞれ独立したのではなく、密接に関連したものであるという報告が出されています。このような問題を防ぐためには、TogawaとMoriyama(1986)や小嶋秀夫(1986)が提唱する養護性の育成が重要とされます。養護性とは、小嶋によれば「相手の健全な発達を促進するための共感性と技能」とし、その対象は子どもだけでなく、障害のある人やお年寄り、さらには一時的にその可能性を失った状態にある人々(例えば、疲れているおとな、落胆して元気を失った人など)や、動植物も含めるとしています。「人間発達科」は、この養護性の育成をめざし、同時に養護性と関連する社会性と内省性もはぐくむ教科



6年生の「認知・思考の発達の学習」

として設置されました。子どもたちが自分自身を見つめ、他者を理解し、いろいろな人とかかわり、かかわる相手の発達や向上を促すことができる能力を育てるための教育実践研究を開始しました。そのような能力を育てるためには小学校での6年間は非常に有効です。子ども自身が成長・発達するのと同時に、子どもを取り巻く対人関係が変化するからです。低学年では高学年児童に養護される立場だったのが、学年が進むにつれて低学年児童を養護する立場へと変わります。このよ

うな対人関係における立場の転換を生かして学習を進めます。今までの3年間で、3年生は発達比べ(運動機能、ことば、思考の発達など全般)、4年生は0歳児の発達として乳児との定期的な交流観察、5年生は情動・社会性の発達、6年生は認知・思考の発達といった系統的な学習内容の骨子が出来上がりました。また、実験的・体験的に学習を進めるための教材や題材の開発も行いました。その結果、授業中の児童の行動分析、児童、教師の振り返り、保護者からの報告などから、児童に成長・発達の理解、乳幼児への養護的行動、相手の立場になって考える視



**附属小学校**  
設立年…1980年  
教育目標…人間として生きぬく力を育てる  
児童数…495人  
研究部には、カリキュラム研究、人間発達科、情報教育、授業研究教育研究会、校外研修の6つの部会を設置

点、自分自身への振り返りなどが見られるようになっていくことが明らかになっています。今後の3年間では、1、2年生の学習を検討し、今まで行ってきた3～6年生の学習と合わせて6年間のカリキュラムを完成させることが目標となっています。さらに中学校への系統性を検討することも課題です。



センターの看板を設置する梶田敬一学長(左)と佐々木正道センター長



## データ整備などを通して教育改革をアシスト 教育・社会調査研究センターを開設

今年4月、兵庫教育大学は、社キャンパスと東京地区キャンパスイノベーションセンター内(東京都港区)に「教育・社会調査研究センター」を開設しました。

現在の教育改革では、家庭や地域の教育力を高めることが求められており、それらの動向を実証できる客観的なデータを獲得することが重要視されています。センターではこのような情勢に対処するため、教育と社会に関連するアンケート調査の実施や、過

去の調査データの整備に着手し、それを希望する研究者や学生に提供していきます。また、国内外の関連機関と連携協力して情報を交換し、調査の意義をより多くの人に知っていただくために、国

際シンポジウムや夏期講習を実施していく予定です。

## あなたの学校や街へ“出前講座”します スクール・パートナーシップ事業のご案内



兵庫教育大学では、県内の小・中・高校をはじめ、自主的な研究グループや学習サークルといった地域の生涯学習の場に大学の教員を派遣する「スクール・パートナーシップ事業」を実施しています。「教員の資質向上」「教育の質的向上」「地域内教育の活性化」「児童・生徒等の学習意欲の向上」の4つの柱に沿った220

の講座テーマを用意しています。講師派遣にかかる経費は交通費のみ負担していただきます。どうぞ気軽に利用してください。

### 派遣依頼の方法

①講座テーマを一覧にしたパンフレットを請求②パンフレットで希望の講座テーマが見つければ担当教員に直接連絡を取り、日程・講義内容を相談③教員の内諾を得た後、「派遣依頼書」を大学へ送付

### パンフレットの請求と問い合わせ

兵庫教育大学地域交流推進センター  
☎0795・44・2409

呼ばれた人

### 黒岩督助教授

教育方法講座(教育心理学)

児童・生徒向けに「『見ること』の心理学」のタイトルで講義をしています。いろいろな視覚現象を実際に見てもらい、人間の視覚情報処理の特徴の一端を知ってもらえたらいいです。世間的に心理学は人気なのですが、そこでは「カウンセリングや心理テストなどを通して人間の心を知る」といったことに関心が持たれているように思います。それに対し、私の講義では「心の知り方の一つとしてこういう知り方もあります」ということを、私たちが当たり前のこととして行っている「見ること」を例にとり、まさに「視覚」に訴えながら話を進めています。

## スクールパートナーシップ事業 「呼ばれた人」「呼んだ人」の感想

呼んだ人

### 中村有里さん

県立明石南高校1年

イメージしていた「心理学」とはずいぶん違っていただけ、とても興味深い講義内容でした。特に「目」のことについてよく理解できて面白かったです。点の動きと人の目が起こす作用など、黒岩先生の講義を受けるまでは関係ないだろうと思っていたことも心理学に深くかかわっていると分かりました。同時に大学の内容の難しさも少しだけ知ることができて良かったと思います。あまり慣れない授業内容でしたが、とても面白かったです。

## ◎平成18年度学生募集

### ☆学校教育研究科(修士課程)

入学定員(300人)を前期選抜試験及び後期選抜試験の2回に分割して募集します。

#### 〈前期選抜試験〉

##### ◎学生募集人員(230人)

▶学校教育学専攻		
教育コミュニケーションコース	昼間クラス	12人
	夜間クラス	若干人
スクールリーダーコース	昼間クラス	12人
教育内容・方法開発コース	昼間クラス	18人
	夜間クラス	若干人
生徒指導実践コース	昼間クラス	8人
	夜間クラス	若干人
幼年教育コース	昼間クラス	8人
	夜間クラス	若干人
学校心理学コース	昼間クラス	10人
臨床心理学コース	昼間クラス	25人
▶特別支援教育学専攻		
心身障害コース		20人
特別支援教育コーディネーターコース		4人
▶教科・領域教育学専攻		
言語系コース	昼間クラス	25人
	夜間クラス	若干人
社会系コース	昼間クラス	20人
	夜間クラス	若干人
自然系コース	昼間クラス	16人
	夜間クラス	若干人
芸術系コース	昼間クラス	20人
	夜間クラス	若干人
生活・健康系コース	昼間クラス	16人
	夜間クラス	若干人
総合学習系コース	昼間クラス	16人
	夜間クラス	若干人

◎出願期間 7月15日(金)～22日(金)(消印有効)

◎試験日

筆記試験…8月20日(土)

口述試験…8月20日(土)・21日(日)

◎合格者の発表 9月9日(金)10:00

#### 〈後期選抜試験〉

##### ◎学生募集人員(70人)

▶学校教育学専攻		
教育コミュニケーションコース	昼間クラス	3人
	夜間クラス	若干人

スクールリーダーコース	昼間クラス	3人
教育内容・方法開発コース	昼間クラス	2人
	夜間クラス	若干人
生徒指導実践コース	昼間クラス	2人
	夜間クラス	若干人
幼年教育コース	昼間クラス	2人
	夜間クラス	若干人
学校心理学コース	昼間クラス	若干人
	夜間クラス	10人
臨床心理学コース	夜間クラス	15人
▶特別支援教育学専攻		
心身障害コース		4人
特別支援教育コーディネーターコース		2人
▶教科・領域教育学専攻		
言語系コース	昼間クラス	5人
	夜間クラス	若干人
社会系コース	昼間クラス	5人
	夜間クラス	若干人
自然系コース	昼間クラス	4人
	夜間クラス	若干人
芸術系コース	昼間クラス	5人
	夜間クラス	若干人
生活・健康系コース	昼間クラス	4人
	夜間クラス	若干人
総合学習系コース	昼間クラス	4人
	夜間クラス	若干人

◎出願期間 10月7日(金)～14日(金)(消印有効)

◎試験日 11月12日(土)(筆記、口述試験とも)

◎合格者の発表 12月2日(金)10:00

※昼間クラスおよび夜間クラスのあるコースは昼夜開講制です。昼間クラスは社キャンパスで、夜間クラスは主に大学院神戸サテライト(神戸市中央区)で開講します。

☎入試課 ☎0795・44・2067

## ◎大学院学校教育研究科(修士課程)説明会

大学院(修士課程)の教育課程や専攻・コース改革などの概要について説明します。個別相談の時間も設けています。

### ◎大学院神戸サテライト開催

〈前期〉6月25日(土)、7月2日(土)

いずれも13:30～15:00

〈後期〉9月17日(土)、10月1日(土)

いずれも13:30～15:00

### ◎キャンパス・イノベーションセンター(大阪市)開催

〈前期〉6月18日(土)・14:00～15:30

〈後期〉9月24日(土)・14:00～15:30

☎入試課 ☎0795・44・2067

☎0795・44・2069

office-nyushi-k@office.hyogo-u.ac.jp

## ◎平成17年度オープンキャンパス(学校教育学部)

受験生や保護者、高校の進路指導担当者などを対象にオープンキャンパスを開催します。

◎場所 兵庫教育大学

◎日時 7月17日(日)10:30～16:00(予定)

☎入試課 ☎0795・44・2067

☎0795・44・2069

office-nyushi-k@office.hyogo-u.ac.jp

## ◎公開講座

兵庫教育大学の教育研究の成果を広く社会に提供するため、市民や現職教員などを対象とした「公開講座」を開催します。今年度は、教員養成系大学の特色を生かした内容の17講座を開講し、みなさんの多様な学習意欲にこたえます。

☎総務課社会連携チーム

☎0795・44・2053

office-renkei-t@office.hyogo-u.ac.jp

https://www.secure.daoffice.com/hyogo/

## ◎日本人権教育研究学会大会テーマ「いのちと教育」

梶田毅一学長の基調講演をもとに、他大学の教授や中学・高校教諭からの報告を交えてシンポジウムを開催。また、研究発表分科会として、「子どもと人権教育」「いのちと人権教育」「同和と人権教育」「歴史と人権教育」の4分科会を設定し、研究協議を深めます。

◎開催日 8月9日(火)

◎場所 大学院神戸サテライト

◎対象 当学会員・教育者・大学生・大学院生。人権教育、心の教育、いのちの教育に関心のある人の参加を期待します。

◎定員 150名

◎参加費 3,000円

☎日本人権教育研究学会事務局

☎0795・44・2158(社会系教育講座・藤井)

☎=問い合わせ先 ☎=申し込み先

## 編 集 後 記

これまで12ページだった「教育子午線」は、今号から「学園だより」のテイストも取り入れて、16ページにリニューアルしました。これまでの読者の方々はもちろんのこと、より多くの一般市民の方々にこの広報誌を手にとっていただき、兵庫教育大学との新しいつながりが生まれることを願ってやみません。教育最前線では、今までの学力論争を整理し、教育改革の意義と課題を明らかにするとともに、今後の教育の在り方について考えてみました。(に)

## ◎あなたの声をお聞かせください

「教育子午線」では、読者のみなさまの声を生かした誌面づくりをめざしています。ご意見、ご感想、ご希望などがありましたら、どしどしお寄せください。

●あて先:〒673-1494 兵庫県加東郡社町下久米942-1

兵庫教育大学企画課企画・広報チーム

☎0795・44・2334 ☎0795・44・2009 office-koho-t@office.hyogo-u.ac.jp

**教育子午線**  
Kyoku-Shigosen

第8号 2005年6月発行  
発行/兵庫教育大学 大学広報委員会  
http://www.hyogo-u.ac.jp  
編集協力/㈱神戸新聞マーケティングセンター